Eureka X

六年制通信　№7　令和４年５月20日（金）号

相対的

入学式には必ず「仲間とは自分だけでは到達できない領域に行くために必要な大切な友だち。だから仲間と切磋琢磨して一緒に成長すること。切磋琢磨とは優劣をつけあうことではないということ。競う相手は自分自身で、昨日の自分と今日の自分、今日の自分と明日の自分、その成長だけを考えること」が大切だという話をします。これまでも朝礼などで何度も言ってきたことです。これは要するに他人と自分を比べて傷ついたり落ち込んだりする（幼稚な人が多いから、そして私も昔そうだったから、でも今になってその愚かさがよくわかるから、そんな）のは意味がないと言っているわけですが、人と比べて一喜一憂するのが愚かだと思うのにはもう一つ理由があります。君たちは気づいていないかもしれませんが、人と比べての「人」というのはたいてい非常に限定されています。だって、基本的に同級生だけでしょ、比べるのは。違いますかね。これはなかなか理解しにくいのかもしれませんが、君たちは試験で優劣をつけられていると思っているでしょう、しかもかなり公平に。しかし、正確に言えば君たちは輪切りの競争をしているに過ぎないのです。輪切りとは、同じ学年だけでという意味です。優劣をつける分母があまりにも少ないのです。人間って面白いものですね。日本でさえ、君たちの同級生は何十万人もいるのに、世界には何十億もの人が生きているのに、ほんの小さな集団の、しかも極めて身近な人しか気にならないのですね。おかしなことに同じ学校の人、クラスの人、隣に座っている人と、どんどん目に入る人の数を少なくして、その小さな分母で比べては劣等感を持ったり、逆に優越感に浸ったり、嫉妬したり、そんなことをしているように思います。よく考えるとその劣等感も、その優越感も、その嫉妬も、実につまらないことに思いませんか。でも、つい比べてしまう。これは人間の弱さだね。

これもまた不思議で仕方がないのですが、学年のカラーというのがあるのです。これは学校の先生なら皆さん頷かれると思います。例えば「落ち着きのない学年」とか「おとなしい学年」、あるいは「女子の多い学年、反対に男子の多い学年」、「よく勉強する学年」、「やたら明るい学年」など確かに学年の特徴があります。しかも、こういう特徴は時に全県、どころか全国的に当てはまると言われています。本当に不思議ですね。スポーツの世界では、たまにスター性を持った若者が多く輩出される学年があります。甲子園などを観ていると、確かにそんな学年がありますね。プロの業界の人はドラフトで誰を指名するか迷うくらいだ、今年は「当たり年」だなんて不謹慎な表現をする人もいるくらいです。

成績を比べる話をすると、要するに学年によってずいぶんと違いがあるわけですから、同じテストで同じ 80 点を取ったとしても学年によって順位が異なることに気がつきますね。よく勉強する学年では 80 点でも上位に入らないかもしれません。あまり勉強しない学年ではベスト 3 に入るかもしれません。そう考えると、小さな集団での優劣など集団のカラーに左右されすぎて、本当に「優」なのか「劣」なのかわからないわけです。1 学年上にいたら「優」で 1 学年下にいたら「劣」なんてことがあるのですから、試験のたびに一喜一憂するのもどうかと思いませんか。君たちが学校で受ける相対評価というのは、所属する集団に大きく左右されるということを覚えておくことです。やがて社会に出て学年のような輪切りの集団を離れると、今度は試験の点数のような単純なモノサシではなく、もっと複雑でもっと総合的な指標で評価されることでしょう。「やさしさ」とか「真面目さ」とか「直向きさ」とか、私たちには点数化を拒む資質がたくさんあるのですから。もちろん、比べることがよくないと言っているのではありません。比べることで前向きに努力のできる人もいますからね。論語にも「己に如かざるものを友とするなかれ」とありますから、自分より優れた能力を持った人間を友人としなさい、と孔子は言っているのです。これは確かに至言だな。自分より優れた、と認識するには自分と比べないと無理ですよね。

今週のおすすめ

・東野圭吾　『マスカレード・ゲーム』　（集英社）

佐藤正午さんの『月の満ち欠け』と『アンダーリポート/ブルー』を読みました。『月の満ち欠け』は再読でしたがやはり面白かったですよ。以前この通信でも紹介しましたが、私は生まれ変わりの思想を面白く思っているので。例の「人間一回目か、しゃーないな」ってやつね。ただ、佐藤さんの文体が私にはまどろっこしく、正直に言うとかなりしつこいと思いました。『アンダーリポート/ブルー』は伏線がくどすぎて、わざわざエンディングを陳腐なものにしてしまっているかのようでした。ファンの人には申し訳ないですけど…。で、ちょっともやもやしていたところ東野さんの新作が出たというので早速読みました。面白かったので、ついでに『マスカレード・イブ』も読み直しました。これ、出た時すぐに読んだはずなのに内容を全く覚えていなくて驚きました。苦笑しつつ読み返しましたが、忘れていた分余計に楽しめました。これで『マスカレード…』は 4 作目です。舞台はいつものホテル・コルテシア。しかし山岸さんは確かロサンゼルスに行ったのではなかったか。東野さんが新田・山岸のコンビ復活を期待する読者を裏切るはずがないと思って読み進めましたが、なるほどそうきましたか。ま、あとは読んでのお楽しみということで。このシリーズはこれで終了らしいのですが、もったいないですね。でも、いいラストシーンでしたよ。もう一作くらい書けそうなんだけどなぁ。

ミステリーでも何でも忘れてしまうのですね。今回それがよくわかりました。だから、面白かったという印象を持った本は手元に残すべきだと、改めて思いました。

BGM は　Carly Rae Jepsen の *I Really Like You* でした…。